

時がよくても  
わるくても

個人伝道のでびき

*Mrs. L. A. ...*



## もくじ

- 1章   ピリポから学ぶ個人伝道
- 2章   個人伝道の担い手である私たち
- 3章   誰に福音を伝えるか
- 4章   何を伝えるか
- 5章   個人伝道の励ましのために
- 付録 I  夏期学校における1対1の話し合い
- II  未信者がよくする10の質問と解答例
- III 個人伝道チームの証し  
            《私は～から～へ変えられた》
- IV 個人伝道の学びと実践のための推薦図書

……はじめに……

☆ 「個人伝道しましょう」と誰かに勧められた時、あなたの心のうちに起こる思い、感情はどんなものですか？

この質問は、私が数年に渡って取り組んできた「個人伝道チーム」を実施する時に、参加者の学生兄弟姉妹に対して最初にする質問です。この問いに対して今までに参加した人たちから、以下のような答えが返ってきました。

- ▽何か強制的な感じがする。個人伝道を勧める人が自分でやれば良い。
- ▽自分に個人伝道への思いがあれば納得して「よしやろう！」と思うだろう。
- ▽「自分にはできない！」という恐れのお気持ちがまず起こってしまう。

以上の答えの中で特に3番目の答えが大半を占めていました。そこで、もう少しつっこんで次に「どうして個人伝道を恐れるのですか？」という質問をしてみました。その質問に対しては次のような反応がありました。

- ▽周囲の人から変な目でみられたくない。  
(個人伝道をすると、周囲の友だちから見ればそれは押しつけに感じられ、その結果、友達関係が円滑でなくなるのではないか…)
- ▽自分自身に「救いの確信」がないから、個人伝道の動機づけが得られない。
- ▽今のことしか考えられないから、「終末」の危機感がない。
- ▽まだ自分には聖書の知識がない。良くわかっていないから疑問に答えられない。個人伝道は聖書知識の深い牧師や伝道師に任せておけば良いという思いが先行してしまう。
- ▽忙しくて未信者と触れる機会があまりない。そんな人たちにいきなり「個人伝道する」と言っても違和感がある。
- ▽伝道する自分がふさわしい存在ではない。

これらの意見に対して、皆さんはどんな感想を持ちますか？ある意味で、背伸びをしないでこれらの事実を率直に認めることが必要でしょう。そしてこの問題を具体的にどのように解決していくか、という意識的な取り組みが大切です。また、そのことと共に「個人伝道を恐れる」という弱さを持ったお互いが「それでもなんとか誰かに個人伝道を」という祈りを持ち続け、互いに励ましあって、個人伝道を実践したいものです。

それでは、「個人伝道」について最初に聖書に記されている一つの実例から学びましょう。

## 1章

**ピリポから学ぶ個人伝道** 使徒8章26～35節

## (1) ピリポとはどんな人だったか

ピリポの名前は使徒の働き6章5節に登場しています。ピリポが属していたエルサレム教会では、ギリシア語を使うユダヤ人たちがアラム語を使うユダヤ人たちにより、毎日の配給をなおざりにされていた、という問題が起こっていました。その問題に対して、12使徒は自分たちが「神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません」(6:4)と判断して、この問題の対処のために御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たちを7人選ぶことを提案しました。その7人のうちの1人がピリポだったのです。ここで重要なことは、ピリポが使徒たちのように、祈りと御言葉の奉仕に専念する人ではなかったということ、つまり今日的に言えば牧師、伝道師ではなく信徒であったということです。彼は、食卓の奉仕を通して、7人のチームワークで問題解決のために取り組むという貴重な経験を積みました。

しかし、ピリポは「信徒」という立場ながら積極的にキリストを宣べ伝える人でもありました。彼はイエス様がなさったサマリヤ人伝道を継承する働きをしていました。(使徒8:5,6) この箇所を見ると、サマリヤでの伝道は最初、一人でしていましたが、途中からは使徒ペテロ、ヨハネも加わり、チームで伝道していたこともわかります。(使徒8:25)

## (2) どんな経緯でエチオピアの高官に個人伝道をするようになったか

さて、そのピリポがエチオピアの高官に個人伝道をした記事が次に出てきます(使徒8章26～39節)。ピリポが個人伝道を実践した

のは、主の使いの言葉を聞いてガザに下る道に向かい、そこで見かけたエチオピアの高官に近寄るように、との御霊の声に従ったことによります。エチオピアの高官はかなり身分の高い人だと思われれますが、エルサレムに礼拝のために自ら出かける敬虔な人でした。また1人でイザヤ書を読み、神様を求める思いを持った人でした。その人のところに、御霊はピリポを導いたのでした。

この出来事から、個人伝道の主体は個人伝道者を導き、使命を与える御霊なる神様であること、そして個人伝道は決して私が計画の中心となって実施するのではなく、神様の主権のもとで私たちが実践していくものであることを教えられます。

### (3) ピリポはエチオピアの高官とどのように接し、彼を導いたか

御霊の主導のもとでピリポとエチオピアの高官との出会いが実現しましたが、ピリポはどのような配慮をこころがけて、彼にイエス・キリストを宣べ伝えたかを次に整理してみました。

#### ① 質問を投げ掛けてエチオピアの高官との交わりを始める。

(30 節)

問いかけることは、相手への関心の第一歩であると言えます。個人伝道はこちらから一方的に語りかけるのではなく、まずは質問を通して相手の必要を聞くことから始めたいものです。

#### ② いっしょにすわるように、との依頼に応じる。(31 節)

相手の人があまり緊張することなく、落ち着いて話ができる場所でいっしょに時間を過ごすことの大切さを教えられます。どういう場所で話すかは、自分で決めるより、相手の気持ちを尊重した方が良いでしょう。

#### ③ 高官が質問した聖書箇所の意味について誠実に答えることを出発点として、イエス・キリストのことを宣べ伝えた。(34,35 節)

このことにも、ピリポが相手の必要を良く聞いてから個人伝道をはじめた姿勢が良く現われています。また「この聖句から始めて、イエスのことを宣べ伝えた」(35 節)と記されているように、ピリポが

聖書の部分と全体のつながりに良く通じていたことがわかります。個人伝道の助けとなるマニュアルは確かに1つのまとまりがありますが、逆に枠にはまっていて応用が効かないという欠点があります。個人伝道の相手は、神様からユニークに創造された1人1人であるので、あまり特定のマニュアルに頼らず、自分で日頃から聖書に親しみ、ピリポのように臨機応変に聖句からイエス・キリストを宣べ伝えていけるように祈り求めていきましょう。

#### (4) ピリポの個人伝道とKGKが目指す個人伝道との共通点

ここまで、使徒8章からピリポのエチオピアの高官への個人伝道の様子を見てきましたが、以上をまとめると

- ① 御霊の働きかけで個人伝道に導かれたピリポ
- ② 他の信者、使徒との交わりや協力のもとで伝道の働きを進めたピリポ
- ③ 相手の人格を尊重して個人伝道を実践したピリポ

というピリポの姿が浮き彫りにされました。

実はこれらの特徴は、KGKがこれまで大切にしてきた個人伝道を含む学内伝道のスピリットとたいへん類似していると言えます。KGKは「人格的伝道」を強調してきました。次の文章がそのことを的確に言い表わしています。

「そして、個人伝道(Personal evangelism)も、読んで字のごとく、人格的なつながりを通しての伝道も意味するのです。決して孤軍奮闘の「孤人伝道(individual evangelism)」ではありません。キリスト者がバラバラに伝道するのではなく、心をひとつにして主を拝し、交わりをもって主を証していく時、キリスト者ひとりひとりにとっても、信仰の人格的成長が深まり、他方未信者にとっては、自分自身が深く受け入れられているという人格的な経験を通して、御言に心を開いていきます。(「学生の伝道 1984」KGK p. 14)

つまり人格的伝道とは、神様・兄弟姉妹・未信の友との人格的関

係の中で実践される伝道のことです。そのことを、ピリポの例を用いてもう少し具体的に考えましょう。

- ① 伝道の使命が、神様との日々の人格的交わりを通して与えられます。

ピリポは御霊に導かれてエチオピアの高官に個人伝道しましたが、そのことから、彼が御霊の導きを鮮やかに認知できるほどに、日常的に父・子・御霊なる神との人格的交わりに生きていた、と考えられます。私たちも、「静思の時」を多忙な日常生活で優先して、御霊の導きの声に敏感でありたいものです。

- ② 伝道の実践は、共に学内KGKのグループで活動する仲間との人格的交わりを土台として行なわれるものです。

ピリポがサマリア伝道をエルサレム教会から散らされて（派遣されて）行なったように、またその伝道の途中からペテロとヨハネが加わって共に奉仕したように、伝道は「孤軍奮闘」で行なうものではありません。むしろ、いつも私たちの伝道の奉仕のためにとりなし、伝道する上での知恵を提供してくれる兄弟姉妹の存在が必要です。そして、その仲間たちと主イエス・キリストをかしらとして連なっている、という同労者意識を持ち、互いの重荷を負い合う人格的交わりを保ち続けることで、伝道への励ましを受けることができます。

またある場合には、交わりの結果として、ハプニング的に伝道の結果を見ることもあります。そのことをKGKのかつての総主事有賀寿氏は次のように述べています。

「学生がキリスト者学生であることを、聖研・祈り・信仰の実践を通して追求し合う、まじわり…、そういうまじわりをもつとき、そのまじわりの周囲に…ハプニングとしての伝道的結果が生じてくる。」（「主が建てるのでなければ」1987.KGKP.176～177）

信者同志の人格的交わりが及ぼす影響がいかに大きいものである



かを、感動を持って教えられることです。

- ③ 伝道は未信の友を神の作品として尊敬し、人格的に接していく中で相手との信頼関係を得られ、促進していきます。

ピリポがエチオピアの高官の人格や要望を尊重して個人伝道を実践したように、私たちも相手の関心や気持ちを十分に配慮しつつ、信頼関係を作って、福音を伝えていきたいものです。

以上、第1章ではピリポを中心に、これまでのK G Kの伝道スピリットについても触れながら、個人伝道の姿勢について見て来ました。次の章では、個人伝道の担い手となる私たち自身について目を向けていきます。

## 2章

### 個人伝道の担い手である私たち

#### (1) 召された者とは誰のことか

「あなたがたも、それらの人々の中であって、イエス・キリストによって召された人々です。」

(ローマ人1:6)

#### ① 召しは特定の誰かに賜物として与えられたものなのでしょうか？

私たちがクリスチャン同志で使う言葉、いわゆる「キリスト教用語」があります。「召し」という言葉もその一つだと思われませんが、キリスト教用語は案外、言葉だけがひとり歩きしていたり、もともとの聖書で語られている本質からかけ離れて、正しく理解されていないことがあります。それは、私たちが信じる信仰の基本的理解を妨げることにもなる深刻な課題です。

例えば「聖化」はすべてのクリスチャンが信じた時に約束されたもの(1コリント1:2,6:11,)なのに、道徳的悪からのきよめ(これも聖化の一領域ですが)だけを取りあげて、「自分は聖化とは関係ないクリスチャンだ」と思いこむ人がいます。また「献身」について聖書では「兄弟たち。…あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」(ローマ12:1)と、すべてのクリスチャンを対象にして語られているのに、牧師・伝道師になることだけを「献身」と間違えて捉えて、この言葉を使用する傾向があります。「召し」についても献身と同様に、何か特別の奉仕につく人だけを「召された人」と理解し、「自分は召されていないから、伝道する器ではない」と勝手に決め込んでいるクリスチャンを時々目にします。果たして「召し」とは特別の人たちだけに賜物として与えられるものなのでしょうか？

## ②召されるとは救われること

冒頭に記した聖句から、「召される」とはイエス・キリストによって与えられるもの、すなわち「救われる」とこととほぼ同じ意味であることがわかります。ここで「召された」と翻訳されている言葉は「κλητοσ (クレートス)」というギリシア語ですが、この言葉が新約聖書の他の箇所ではどのように用いられているかを調べてみると「召された者」にどんな特権が与えられているかについて以下のことがわかります。

1. 神とイエス・キリストによって呼び出された者、招待された者  
(ローマ 1:6, 7)
2. 神のご計画に従い、自分の歩みすべてが益となることを知った者  
(ローマ 8:28)
3. ギリシア人、ユダヤ人という民族の枠を越えて、キリストによって神の力と知恵を共に味わえる者  
(I コリント 1:24)
4. 神の言葉を伝える者=使徒、としての使命が与えられた者  
(ローマ 1:1, I コリント 1:1)
5. キリストが共にいて下さることで悪の力に勝利できる者  
(ヨハネ黙示録 17:14)

これらの特権は、特定のキリスト者だけのものではなく、すべての聖徒たち、すなわちキリスト者に与えられているのです。(ローマ 1:7)ですから「召された者」とは私たちのことでもあるのです。これが御言葉の約束です。もし私たちがこのことを自分のこととして明確に捉えているならば、恐れずにあかしや伝道ができるわけです。しかし、現実が必ずしもそうでないのは、御言葉が約束している「召

●個人伝道の担い手である私たち●

された者の特権」を、私たちが実感していないからではないでしょうか。そこで、この約束を自分のこととして確認していくために、次に具体的な提案をします。

(2) 召されたことを確認するために

私が神様によって召されていることを自覚的に受け取っていくためには、私がどのようにして召されたか（救われたか）、キリスト者になったかを、立ち止まって思い返してみることが大切です。具体的には、自分の救いについての「証し」を書くことを勧めます。

皆さんの中には、自分がいつ召されたか、救われたかが明確でない人、また自分はクリスチャンホーム育ち、教会学校育ちでいわゆる「劇的回心」の経験がないので、他の人に証しする内容を持っていないと躊躇する人もいるかもしれません。しかし、神様は私たち一人一人を歴史上たった一人しかいないユニークな存在として造って下さったのですから、何も救いの経験が劇的でなければならぬ必要はありません。また、私を胎内に形造る前から私を知っていて下さる神様（エレミヤ 1:5）に目を向けるならば、私が生まれてから今日までの歩みのすべてを知っておられる神様が私を少しずつ、御手の中で導いてこられたことを確信できると思います。そのような思いで、自分の人生をふりかえり、神様が私に対して与えて下さった「救い」「召し」について整理したらどうでしょうか。

この整理をする時に心にとめてほしいことは、

① 今の自分は～から～へと変えられたかを明記する。

御言葉はその点について以下のようにはっきりと示しています。  
「彼らの目を開いて、暗闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ…」

(使徒 26 : 18)

「暗やみの圧政から救い出して、愛する御子のご支配の中に移して

くださいました。」

(コロサイ 1 : 13)

「やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった…」

(Iペテロ 2 : 9)

私たちの変化は小さな変化かもしれません。しかし「悔い改め」とは方向転換であると言われるように、方向転換の決意をした結果として、何かの変化を見いだせるのではないのでしょうか。また変化の度合いや程度は、他の人と比較するものでもありません。静まって自分が～から～へと変えて頂いたかを確認し、それを文章の形で整理してみてください。

② できるだけキリスト教用語を使わずに、自分の言葉で、未信の友が聞いても理解できる言葉で書いてみる。

「贖い」「恩寵」「御心」「摂理」… これらの言葉は一応、辞典には収録されていても、日常はあまり使用されていません。しかし、キリスト者同志の交わりや教会では頻繁に用いられているので、前述したようにキリスト教用語と言われます。これらは、未信の人にとっては聞き慣れない言葉なので違和感を与えてしまいます。また何気なく使用してしまう私たちも、実はわかっているようで、十分に理解せずに用いていることがあります。

未信の人にできるだけわかりやすく自分の体験を証しするために、また証しする自分自身が意味を良く考えて分かち合うために、できる限りキリスト教用語を使わないで、証し文を書くように努めてみてください。この提案は、過去に何度か実施した「個人伝道チーム」(\*後述)の参加者に勧めました。その時の参加者が苦心して作った「証し文」を実例として付録Ⅲに掲載しておきましたので、参照してください。

●個人伝道の担い手である私たち●

(3) 自信をもって臆せず伝道するために

それでは、私たちはどうして神に召されたのでしょうか。それは…

a 私たちが平和を得るためです。

「神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。」

(I コリント 7:15)

b 私たちがきよい生涯を歩むためです。

「神が私たちが召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、  
聖潔を得させるためです。」

(I テサロニケ 4:7)

これらのことと同時に次の目的があることに注目しましょう。

c 私たちが真理のメッセージを伝えるためです。

「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

…むしろ愛をもって真理を語りあらゆる点において成長し…」

(エペソ 4:1, 15)

私たちが召された一つの目的は、真理を語ること、つまり真理の言葉であるイエス・キリスト、福音を宣べ伝えることなのです。(コロサイ 1:5) この真理を大胆に語るためには、前項で記したように、自分の救いの経験を整理することと共に、聖書を通して次の点について学ぶことが大切です。

① 救い(神との関係の回復のプロセス)を理解する

聖書が示している神と人間の間を関係を理解し、今自分が得ている救いの意味、幸いについて再確認することが個人伝道の担い手である私たちにとって重要です。これまで30年近くの長い間、日本またはアジアで学生伝道の励まし手として奉仕しておられる太田和主事が今から13年前に指摘した次の言葉は、傾聴に値すべき言葉です。

「…現代クリスチャン学生の共通の問題があるように、私には思えます。それは聖書の示す福音の全体、救いの全体についての知的理解が、乏しいということです。あまりにも主観的な体験に基づく救いの理解…、あるいは、福音のエッセンスならぬ、簡略化された、かつ断片的な福音理解の問題です。」

(週刊キリスト者 960 号、1985.12.22)

さて次に 1995 年の夏に関東地区 K G K で行なわれた「救いの確信セミナー」の講師であった関根一夫師が用意して下さった資料を一部引用しながら、創造→墮落→墮落の結果→キリストにある新創造という「救いに至るプロセス」についてまとめてみました。

- a 創造 \* 神のかたちに創造された人間 (創世記 1:26~27)  
創造的、ユニーク(唯一)、靈的、愛にあふれる存在、  
という神の性質を持つ存在として人間は創造された。  
\* 神にいのちの息を吹き込まれて創造された人間  
(創世記 2:7, 8)  
\* 永遠への思いを持つ者として創造された人間  
(伝道者の書 3:11)

☆神は人間をすべての被造物の頂点として創造されました。創造の中に見られる神様のみわざ、特に人間に対する特別の思いに注目しましょう。

b 墮落 創世記 3:1~7

☆しかし女とアダムは「神のようになる」(3:5)という蛇の言葉に誘惑され、神の命令(創世記 2:17)に従順に生きることを拒絶しました。それは神の警告を真正面から踏みにじる自発的自己的な反抗でした。



人間の無罪性が喪失。

アダムとは「人間」という意味であり、アダムの責任は全人類に及びます。

●個人伝道の担い手である私たち●

c 墮落の結果

- 恐れ、恥、非難に支配される (創世記 3:8~13)
- 罪と死に支配される (ローマ 5:12)
- 神の怒りの下におかれる (ローマ 1:18)
- 死後の裁きが定められた (ヘブル 9:27)

☆アダムに属する人間すべては、神との関係において「罪人(ローマ 5:8)、神の怒りのもとにおかれ(ローマ 1:18)、神の敵(ローマ 5:10)」となりました。この深刻な状況は、全人類に及んでおり、人間は自分の力ではこの状況から脱出できません。

d キリストの十字架上での罪の赦し

キリストは、神の御子、すなわち神であられたが、仕える者の姿をとって、人間と同じようになられた。そして実に十字架の死にまでも従われた。

(ピリピ 2 : 6 ~ 8)

神は人間の罪ゆえに、御子を十字架にかけ罪を処罰された。

(ローマ 8:3)

血を流すことなしに罪の赦しはありえない。

(ヘブル 9:22)

神は人間の罪ゆえの怒りをなだめる(静める)ため御子を遣わした。

(Iヨハネ 4 : 10)

☆ 神から遣わされた御子イエス・キリストは私たちと同じ肉体を持つ人間として、この地上での生活を送られました。そのキリストが十字架上で血を流し、人間が自分の罪ゆえに本来受けるべき神の裁きを代わりに負って下さいました。

e 回心とその結果

回心とは私たちが十字架のメッセージを信じること

(Iコリント 1:21~25)



回心とは「悔い改め」という賜物が神から与えられること  
(使徒 11:18)

回心の結果、私たちは「新しく造られた者」となった  
(Ⅱコリント 5:17)

回心の結果、私たちは「神と和解」させて頂いた  
(Ⅱコリント 5:18)

☆ この結果を与えられて生きる人が「救われた人」「召された人」  
です。

尚、「救いの全体像」に関して興味のある人は、太田和功一著「信  
仰の土台の再確認」(1995. K G K)の一読をお薦めします。

## ② 救われた私たちのこの世での使命を確認する

さて、「救い」を経験した私たちは、その神との関係が回復したと  
いう救いの素晴らしさを観念としてでなく、実生活で味わい続ける  
ために、自分たちが救われた意味をしっかりと把握する必要があるで  
しょう。

私たちが救われたのは…

a 神様から委ねられたこの世界を、神様から与えられた賜物を生  
かして管理するためです。

私たち人間は、始め「神のかたち」に創造されました。しかし、  
罪ゆえに神のかたちがゆがめられ、神様から与えられた世界管理の  
使命(創世記 1:28, 2:15)が損なわれました。けれども、キリスト  
が人間の罪の問題を代わりに十字架上で処分して下さったゆえに、  
断絶していた神と人との関係が回復しました。それは、創世記に記  
されている最初に人間が神から与えられた使命、すなわち他の被造  
物を正しく管理し、それらと共生していくという使命の回復です。  
大学生の皆さんが今それぞれの専門領域で学ぶ目的とは、実は将来、  
広い意味での「世界管理」の使命に取り組む準備のためなのです。

●個人伝道の担い手である私たち●

b 福音を宣べ伝えるためです。

このことは、「召された目的」の一つとして既述しましたが、救われた私たちが地上での生活を送る使命は、他の人たちにこの救いを宣べ伝えるためであることを以下の御言葉は明確に示しています。

「神は…和解の務めを私たちに与えてくださいました。」

(Ⅱコリント 5:18)

「私は…負債を負っています。ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。」

(ローマ 1:14, 15)

「すべての人にすべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」

(Ⅰコリント 9:22)

「宣べ伝える人がいなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」

(ローマ 10:14, 15)

これらのパウロの「福音を宣べ伝える」ことへの情熱は、特定の人に与えられた使命ではなく、救われた者、召された者すべてにとって、すなわち私たちにとっての生きる使命であることを、いつでも確認してそれぞれが遣わされた大学での生活を送りたいものです。尚、福音を宣べ伝えることと祈ることとは、切り離すことができないほど、深く関連していることも覚えておきましょう。このことに関する次の言葉を心にとめたいものです。

「伝道の任務に二つの側面があるという事実直面するからである。それは、宣べ伝える任務ばかりでなく、祈る任務でもある。人々に神のことを話すだけでなく、神に人々のことを話すことである。宣教と祈りは並んで進まなければならない。」

(J・I・パッカー「伝道と神の主権」いのちのことば社 P.144)

③ 福音と日常生活、福音と未信者の関心の接点を自ら観察し、発見する。

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」  
(ローマ1：16)

この御言葉の約束がありながら、私たちが時として友人、知人に福音を伝えることを「恥」と感じてしまう理由の1つは、福音が本当に私たちの周囲の友人にとって必要なものだ、という確信がかけられているゆえです。

「私はたまたまクリスチャンホームに生まれたのでクリスチャンになったけれど、自分の友人には自信を持って福音を伝えられない」と躊躇する人もいるでしょう。その躊躇は、福音の真理が私たちの日常の出来事、また関心をもっていることと何らかの形で接点があることを自らが気づき、発見することで解消していきます。未信の学生に何らかの形で福音を届けたい、ということを経常問題意識として持ち、未信の学生と話すきっかけ作りに心を砕いている主事たちの中には、この点について以下のような工夫をしている人たちがいます。

**ケース1 イエス・キリストの十字架をどのように伝えるか**

●アンパンマンの哲学とイエス・キリスト

自らが傷つき、犠牲となって苦しめられている者を助ける正義の味方「アンパンマン」の姿とイエス・キリストの愛は類似している。ちなみに「ジャムおじさん」に新しい顔に変えてもらい、力を回復し、敵である「バイキンマン」を退治するアンパンマンに復活のイエスを垣間見ることが出来る。

●個人伝道の担い手である私たち●

ケース2 神の無条件な愛を説明するために

●阪神タイガースファンと神の愛

阪神がどんなに弱くても、ファンであることをやめないで阪神というチームの存在そのものを愛する阪神ファン。それは何かができるから、成功するからでなく、存在そのものを丸ごと受け入れ、愛して下さる神の愛に類似している。

ケース3 人生の土台である聖書の権威について紹介するために

●キックベースを一緒にしたときに…

キックベースでボールをより遠くにキックする時に必要なのは軸足である。それと同じように、私たちの人生に置いて周囲の変化に揺さぶられずしっかり歩んで行くには、普遍的な軸足が必要である。その真理の軸足となる言葉が集められている書物、それが永遠のベストセラーを言われる聖書である。

このように、私たちの身近な出来事、関心の中からも福音の真理を紹介できるチャンスはたくさんあります。KGKの50周年記念集会でR・ブラウン IFES 総主事は、次のようなメッセージを語りました。

「若者は私たち以上に創造力や適応力が豊かです。私たちは若者の創造性によって助けられ、多種多様な方法で福音宣教を拡大していくことが出来ると思います。」

この言葉は、今の時代に学生として生きる皆さんに対しての励ましに満ちたチャレンジです。皆さんが日常生活の体験や、現在流行しているドラマ、歌、映画と福音との接点を見だし、そのことをきっかけとして未信の友に臆せずに福音の真理の言葉を語っていきましょう。

### 3章

## 誰に福音を伝えるか

前章では福音を伝える私たちの心備えについてを記しましたが、この章では、「それでは誰に対してこの福音を語るのか」についてを考えてみましょう。

福音が「信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力」(ローマ 1:16) という御言葉の原則に従えば、私たちは福音の対象を限定することはできません。しかし、イエス・キリストが父なる神様に向かって「あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」(ヨハネ 17:18)と祈った祈りに目を向ける時、私たち一人一人はイエス・キリストから世(世界)に遣わされていること、そしてその遣わされている世界とは実際的に、自分が今置かれている生活の現場であることを教えられます。それゆえ私たちが意識として、「すべての人に福音を」というビジョンを持ち続けることは大切ですが、地に足をつけた生活の中で接する人たちに福音を伝えていくことが、実際的に「遣わされて生きる」ことだと言えます。K GKでは、その意味で「学内伝道」「身近な友人への伝道」を大切にしてきました。次の言葉は、そのことを的確に表わしています。

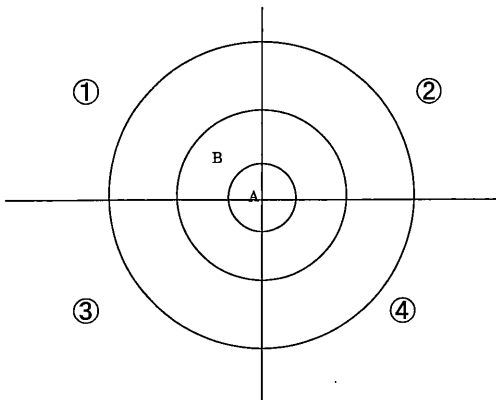
「…ですから、証しや伝道の場合は、単に特定な集会ばかりではなく、クラスとかサークル、アルバイト先とか、家庭とか、その他に私たち一人一人が生活する場として与えられているすべての生活領域が、そのような証しとして伝道の場になりうるということです。不断に絶え間なく、徐々に、しかも適切な時に…というのが、K GKが大事にしてきた伝道スピリットの特色といえるかも知れません。」

(「学生の伝道 1992」K GK P.47,48)

さて、このような理解に立って、实际的に「誰に福音を伝えるか」について焦点を明確にするためにはどんな工夫が必要でしょうか。一例として以下のような提案をします。

(1) 自分の周囲に今、どのような未信の友人、知人がいるかを作業を通して思い巡らす。

今、皆さんには未信の友人がどのくらいいますか。クリスチャンだけの活動にあまり熱中し過ぎていると、「気がついたらほとんど未信の友人がいなかった」という人もいるかもしれません。そこで数の多少はともかく、次のような図を描く作業を通して「未信の友人との関わりりの現状」と「友人伝道の可能性」について思い巡らして下さい。



上の図の番号①～④は次のように分類したことを表わすものです。

- ① 家族・親族関係で未信の人たちの名前を書く

- ② 通っている学校の友人、知人で未信の人たちの名前を書く
- ③ 高校までの友人、アルバイト先の友人、知人など学校以外でつながりのある未信の人たちの名前を書く
- ④ 自分が所属している教会に現在集っている未信の友人、知人の名前を書く

また三重に描いた円は次のように分類したことを表わすものです。

- A. 福音に対して、今現在、関心や求めが強いと思われる人
- B. 福音に対してまだそれほど関心はないが、時々キリスト教や聖書の内容、また教会について質問したり、こちらからこれらのことについて話す機会のある人
- C. 福音に対して今のところ全くといっていいほど、関心がないように見えるが、機会があればいつか福音を伝えてみたいと思っている人

①～④であげた友人、知人がそれぞれA～Cのどの段階にいる人たちであるかを考えて、作成した三重の円の中にそれぞれ名前を書き込んで見てください。

この作業を実施することで次のようなことが発見できます。

- ▽ 今、自分の周囲にいるどの友人、知人のために祈るべきかが明確になります。Aの欄に名前を記入した人たちに対して「自分が彼らに今働きかけられることは何か」をより具体的に祈り求めることができます。
- ▽ Bの欄に名前を記入した人たちに対して「彼らがイエス・キリストのメッセージを一般論、他人事としてでなく、自分のこととして受けとめられるように」との願いが強まることでしょう。
- ▽ Cの欄に名前を記入した人たちに対して「彼らに福音が必要であること、だから彼らが福音のメッセージに対して少しでも関心を

持つように」との願いが起こります。

▽ 今自分が未信の友人、知人とどういう関わりを作っているかが明確になります。ある人は、この作業を通して自分が「いかに未信の友人、知人との関わりが少ないか」を思い知り、クリスチャンばかりと接している自分のライフスタイルを見直す機会となります。

(2) 作業を通して発見したこと、整理したことに基づいて、未信の友人、知人の名をあげて祈り始める。

▽個人のデボーションで

▽学内グループのDPM、祈り会で

▽ブロック祈禱会で

▽有志の個人伝道チームで（詳細は後述）

個人の祈りや祈り会で具体的に名をあげて祈る時、聖霊の助けと導きによって、名をあげて祈った人にハプニング的に出会い、福音を語るチャンスが訪れるという胸躍る経験を、私は今まで何度かしました。

ここで紹介した作業は、あくまでも個人伝道を誰に対して実践していくかを意識するための一例ですが、今まで「誰に福音を伝えるか」という思いが漠然としていた人たちには、特に実践することをお薦めします。



## 4章

**何を伝えるか** 伝えるべき福音とは

フランシス・シェーファーは彼の著書「理性からの逃走」(1971、すぐ書房)の中で、現代神学は二元論(非理性社会と理性的世界)を受け入れ、宗教に関する事がらを非理性的、非論理的世界に位置づけているが、福音派もその影響を受けて「重要なのは、教理を立証や反証することではなくて、イエスに出会うことであると主張する者」(p. 95)が出てきたことについて警鐘しています。彼は、このような考えが蔓延すると、「なぜイエスでなければならないのか、に答えられない」とも語っています。今日の私たちの周囲では神秘主義が横行し、福音派の私たちも少なからず影響を受けています。例えば口では「イエス様」と叫んでも、あまり聖書からイエス御自身について学ぼうとしないで、自分にとって都合の良いイエス様理解であったり、自己満足のための叫びであったりします。それゆえに、シェーファーの指摘に耳を傾ける必要があること大であると思います。

「宣べ伝える」ということも、熱心さだけでなく、一体私たちは何を伝えるのか、という教理をしっかり把握する必要があります。例えば「使徒の働き」全体の中から「何を宣べ伝えるのか」を調べてみると、その内容は「死者の復活」(4:2)、「イエスがキリストであること」(5:42)、「福音」(8:25)、「イエスのこと」(8:35, 11:20)、「イエスが神の子であること」(9:20)、「キリストによる平和」(10:36)、「主のみことば」(15:35)、「救いの道」(16:17)、「御国」(20:25, 28:31)、「光」(26:23)であることがわかります。

J. I. パッカーは宣べ伝えるメッセージとは何かについて次のように述べています。

## ●何を伝えるか●

「一言で言えば、伝道のメッセージは、キリスト、しかも十字架につけられたキリストの福音である。人間の罪と神の恵みのメッセージ、人間の罪責と神のゆるしのメッセージ、新生と聖霊の賜物による新しいいのちのメッセージである。それは1) 神についてのメッセージ 2) 罪についてのメッセージ3) キリストについてのメッセージ 4) 信仰と悔い改めへの召し、という四つの不可欠の要素から成っている」

(「伝道と神の主権」 P.63~64)

私たちは、これらのことを聖書全体から更に学び続け、福音の奥義に感動して周囲の友人に、この福音を届けたいものです。

そこで、この章では2章(3)で記したことと一部重複する点もありますが、私たちが個人伝道において友人に「伝えるべき福音の内容」についてを以下の六つのポイントでまとめてみました。尚、この分類はP・リトル著「恐れずあかしをするために・第5章伝えるべきメッセージ」(1991.いのちのことば社)の一部を参考にしています。

### (1) 聖書の示す神とは

#### a. 創造の神である

創世記 1:1, 1:27, 1:31, 2:7…すべてのものは良かった。特に人間を特別の存在として造られた

イザヤ 40:26, 28…宇宙の創造者、永遠の神

伝道者の書 12:1…人間(この私)を造られた神を覚える

使徒の働き 14:15…天地、海を造られた生ける神

#### b. 唯一の神である

出エジプト 20:3…他の神々を礼拝することを否定した神

Iテモテ 2:5…神は唯一

#### c. 罪に対して怒り、正しい裁きをなさる義なる神である

創世記 3:16~19…苦しみ、目的を持たずに労働する人間

詩篇 90:7, 9…神の怒りに消え失せ沈み行くしかない人間

エペソ 2:3…人は 生れながら神の怒りを受けるべき存在

d. 愛の神である

創世記 3:21…神は動物を犠牲にして裸のアダムと妻に皮の衣を着せて下さった (キリストの贖いが示されている)

イザヤ 54:8…怒りはほんのしばらくであり、愛は永遠

エレミヤ 31:3…永遠の愛で愛して下さる神

\* 聖書の示す神は、性質において正義 (厳しさ) と愛 (慈しみ) という両面性を持っています。

(2) 聖書の示す人間とは

a. 神の作品として造られた

創世記 1:26, 27…最も素晴らしい神の被造物として作られた

b. 生きる指針として神から律法が与えられている

出エジプト 20:2, 3…神を神として認めることが律法の命令

レビ 18:5、ネヘミヤ 9:29…律法が人にいのちの道を教える

c. 神から離れ、律法を無視して生きる→罪を犯した人間

詩篇 51:4…神に対しての罪が根本の罪

ローマ 5:12…ひとりの人アダムの影響を受け罪人として生まれる人間

d. 罪の結果としての現実

創世記 3:19…孤独感、虚無感

ローマ 1:26~31 テトス 3:3…道徳観念の欠如

イザヤ 53:6…目的意識の喪失

罪の結果、神と人との関係は断絶しました。そして人は上記のような悲惨な状態に陥りました。ところが愛なる神は、この人間の悲惨な現実をそのままに放っておかれませんでした。旧約聖書には「預言者」を通して神の厳しさと愛を示し、神に立ち返ることを何度も勧めた神の姿が記されています。そしてついに今から 2000 年前に、

●何を伝えるか●

人間の根本の問題である「神と人の断絶」を解消するために、「ひとり子」をこの地上に遣わして下さいました。その方こそイエス・キリストです。

(3) キリスト教の主役であるイエス・キリストとはどんな方か

a. イエス・キリストの自己紹介

① 自分が何者であることを明確に示した方

ヨハネ 6:35…いのちのパン

10:11…良い牧者

11:25…よみがえり、いのち

14:6…道、真理、いのち

15:5…ぶどうの木

② 何のために（この地上）来たかを明らかにした方

マルコ 2:17…罪人を招くため

10:45…人々に仕え命を与えるため

ルカ 19:10…失われた人を捜して救うため

\* イエス・キリストは自己紹介の中で堂々と自分が救い主、真理であることを公言しました。

b. 他の人たちが紹介したイエス・キリスト

① 旧約の預言者たちのイエス紹介

イザヤ 7:14…イエス誕生の預言

53:4~6…イエスの十字架の預言

\*イザヤとはキリスト降誕の700年以上前の預言者

ミカ 5:2…イエスがベツレヘムで誕生するとい  
う預言

\*ミカはイザヤとほぼ同時代の預言者

② ペテロ

マタイ 16:16…「生ける神の子キリスト」

という信仰告白

I ペテロ 2:22~24…イエスの生涯と十字架を紹介

③ パウロ

I コリント 15:3~7…キリスト教の土台であるイエスの  
十字架、復活についての紹介

④ 百人隊長

マルコ 14:39…イエスが「まことの神の子」であつ  
た、と告白

c. 完全な神であり完全な人である

ヨハネ 5:18, 14:9…完全な神であると表わしたイエス

ヨハネ 4:6, 11:35…完全な人であると表わしたイエス

\*100%神である、と同時に100%人である、ということは私たち人間の経験からは理解しがたいので、歴史上多くの人たちがこのことを否定してきましたが、聖書によればイエスはそのような方です。またその特徴を備えておられるので、神と人との「橋渡し役」として人間の罪に同情しつつ、人間では決して解決できない罪の問題の解決者となりうるのです。

(4) イエス・キリストの十字架刑とその意味

マタイ 26:28…人間の罪を赦し解決するために

十字架で血を流されたイエス

マタイ 20:28…贖い(捕虜を解放してもらうために支払

われるお金)の代価として自分の命を

与えたイエス

I ヨハネ 3:16…私の身代わりとなって十字架にかかっ

たイエス

●何を伝えるか●

(5) イエスの復活とその意味

ルカ 24:39…イエスの復活は霊と肉体の復活

使徒 17:18…復活は人間、特に知識人にとって理解しがたい出来事

I コリント 15:12~19…イエスの復活が事実であったればこそ行なえた宣教

(6) クリスマンになるとは

a. 罪の告白と悔い改め

\*悔い改めとは自己中心的な生き方から神を計算に入れた人生への方向転換。

「悔い改めとは…自分を救ってくれると思ってしがみついていたものから手を放し、神のもとに行き、神の御手から救い主を受けとること」

(有賀寿「カゴの鳥と見るな」1974.すく書房P.101)

<聖書に記されている悔い改め>

マルコ 1:15…イエスが勧めた悔い改め

マルコ 6:12…弟子たちが勧めた悔い改め

ルカ 15:18, 20…悔い改めに基づく罪の告白

使徒 2:38, 3:19…ペンテコステ後に

ペテロがした悔い改めを勧める説教

使徒 14:15, 20:21, 26:20…パウロがした悔い改めを勧める説教

\*人を悔い改めに導くのは、聖霊の働きですが、その聖霊の促しに応答する責任が私たち人間に与えられていることを強調したいものです。

b. 罪を解決して下さったイエス・キリストへの信仰の表明

ヨハネ 1:12…イエスを受け入れる、すなわち信じることで神のこどもとされる特権が与えられる。

エペソ 5:20～25…イエスへの信仰とは、イエス・キリストと私の間に愛と服従の関係を築くことである。

黙示録 3:20…イエスを受け入れるとは、神様から与えられた賜物である意志を用いて心の扉を開けて、私の心の中に入れてもらうこと。

- c. 平安・希望と共に信仰ゆえの苦しみ・試練を覚悟すること  
マタイ 11:28～30…イエスと共に重荷、くびきを負う覚悟をする。しかし、キリストが共におられるので荷は軽い。

「救いとは、われわれの重荷が取り去られることであるよりは、われわれがキリストのくびきにつながれ、キリストの荷物を背負うこと」（有賀寿「カゴの鳥と見るな」p.116）

ピリピ 1:29…キリストを信じる信仰と共にキリストのための苦しみも頂くのがクリスチャンの歩み。

「もしあなたが、安易な自己満足をもとめて生きていくつもりならば、何はさておきクリスチャンになるべきではありません。しかし、もしもあなたが、ほんとうに自己を見出し、神がたまわる性質にふかい満足を味わいたいなら、…どうか、自分の生涯をいっさい、いまや一瞬の遅延もゆるさないで、あなたの主にして救い主なるイエス・キリストにまかせてください。

（J.ストット「信仰入門」1995.すぐ書房 P.198～199）

この言葉は個人伝道者が安易に入信を勧めることを戒めています。クリスチャンになる、とは心を定める覚悟を伴うことを見逃してはなりません。

以上、六つのポイントをそれぞれ御言葉を引用して伝える方法を

●何を伝えるか●

紹介しましたが、個人伝道の実践の参考にして下さい。もちろん、御言葉の引用については、自分で聖書を読む中で最も心に留まり、友人に分かち合いたいと思った聖句を引用して下さい。個人伝道に慣れるまでは、六つの項目とそれに該当する聖句をメモした紙を聖書の中にはさんで、必要な時にいつでも用いられる備えをしておく  
と良いでしょう。

個人伝道に携わる私たちは、

- ① 友がイエスの言葉によって信じること（ヨハネ 4:41）
- ② 友が自分で聞いて、イエス・キリストが本当の世の救い主であることを主体的に信じる判断ができること  
（ヨハネ 4:42）

この二つのことをゴールに定めて、自分たちの最善を尽くしつつ  
祈り備えるものでありたいと思います。



## 5章

### 個人伝道の励ましのために 個人伝道チームの勧め

#### (1) KGKの伝道の特徴

KGKはこれまで、学内にグループを作り、そのグループを通して伝道していくことを強調してきました。とは言え、グループを形成する各個人に救いの全体像の理解や、救われた者のこの世での使命についての認識（2章（3）を参照して下さい）が欠けていると、「伝道しないでただ群れているだけではないか」「傷のなめあいをしている」という批判を受けたり、だらだらと無目的に集まり、内から見ても外から見ても魅力のないグループになってしまいます。

それゆえ、「何のために学内グループを作って活動するのか」という目的はいつも確認しておかなければなりません。学内でグループを作って活動する目的は、

①メンバーが学内、学外において所属しているクラス、ゼミ、KGK以外のサークル、アルバイト先の友人、知人のもとに遣わされる備えのために、集まり、祈り、交わるためです。

これは、もちろん皆さんが所属している教会の礼拝、その他の交わりの場で基本的になされていることですが、同じ大学に学ぶ同労者として、互いにイエス・キリストによって遣わされていることを確認しあうことは、たいへん意義深いことです。

②遣わされた場所から再び戻り、報告し互いに励ましあうためです。

アンテオケ教会から神の恵みにゆだねられて第一次宣教旅行に遣わされたパウロとバルナバは、再びアンテオケに戻った時、神が彼らとともにいて行なわれたすべてのことを報告しています。（使徒 14:26～28）

## ●個人伝道の励ましのために●

伝道はキリストのからだに連なるお互いが、それぞれの賜物を生かして携わる業ですから、一人で奮闘するのではなく、同労者に報告し分かち合う必要があることを、この箇所からも教えられます。また、それは単なる義務なのではなく、その報告を通して直接携わる人も、間接的に関わる人も共に励ましを受けるのです。

これらの目的のためにグループ伝道はたいへんに有効です。しかし、グループメンバーの数が10名を越えると、一緒に定期的に集まることが物理的、实际的に困難になります。そこで、3～6人ほどの小グループ活動によって伝道していく知恵が必要となるのです。

イエス・キリストは12弟子を召しだした後、共同生活をしながら、彼らを派遣されたことを私たちは福音書から学びます。このイエス・キリストと弟子たちの親密な関係に焦点を当てて、小グループによる伝道と訓練を提唱したロバート・コールマンは、小グループの意義について次のよう語っています。

「…小グループ運動は、人々の心の中にある、クリスチャン経験のリアリティーへの深い渴望を表している。…小グループの方法が成長への大きな助けとなるもので、そのために私たちは皆、人々と共にする奉仕においてそれをうまく利用すればよいだろう。」

(J-IMP)「伝道のマスタープラン」1995.いのちのことば社 P.170)

小グループ活動による学びと伝道の幸いは、単なる方法論ではなく、イエス・キリストご自身から、またこれまでのキリスト教史からも沢山の事例を教えられることです。関東地区K G Kの学内グループでも、ある時期「アクショングループ」という名前で小グループ活動を通しての伝道が実践されたこともありました。ここでは、ここ数年実施してきた「個人伝道チーム」の紹介をします。

### (2) 個人伝道チームの実践

#### ①始め方

学生の皆さんが、主体的に学内で伝道していくことを心から願う主

事、あるいは個人伝道チームの経験者が、「友にイエス・キリストを宣べ伝えたい。けれどもどのようにできるのかが不安だ。」とっている人たちを対象にして4回に渡る「個人伝道の学びと実践の訓練会」の提案をします。定員は約5名。希望者が2名いれば成立します。申し込みを希望する人は、口頭でなく個人伝道チームに参加する意志を明らかにするために、申し込み書の「私は、個人伝道チームに参加します」の欄に自分の名前を明記して提出します。

### ②開始にあたっての約束事項

- a. 原則として4回とも出席する。
- b. 欠席する場合は、必ず担当者に連絡する。
- c. 宿題を実行する。
- d. 期間中、個人伝道を実践する。(担当者もただ教えるのではなく、自分もチームの一メンバーとして実践することを約束する)

### ③個人伝道チームの内容

(1997. 10, 11 月に関東地区K G K多摩ブロックで実施した内容を参考)

\* ミーティングは隔週で4回に渡って実施。

#### 第1回

- † 伝道を躊躇させる要素について…
- † 個人伝道の動機づけ
  - ①個人伝道を始める上での必要な人間関係について  
(内容の詳細は第1章を参照)
  - ②「救いとは何か」の学び(内容の詳細は2章参照)
- ☆ 宿題…自分の回心(救い)の経験を出来るだけキリスト教用語を使わずに書いてくる。(～から～へと変えられたかを明記することを勧め、実例を担当者が提示)

#### 第2回

- † 宿題の分かち合い(参加者の声)
  - ◇今まで自分の救いのあかしをまとめたことがなかったの

## ●個人伝道の励ましのために●

で、自分の信仰を整理する助けとなった。

◇チームのメンバーの救いのあかしを聞くことで、その人の個人的な神様との出会いがわかり親しみがわいた。

- † 個人伝道で伝えるべきメッセージについての学び  
(内容の詳細は第4章(1)～(6)を参照)
- † 私が伝えたい人、祈り求める人は?作業と分かち合い。  
(作業の方法については、第3章を参照)

### ◎作業を通しての参加者の発見

- ◇伝えていない友人が山のようにいることを発見。
- ◇自分が遣わされているのだということを自覚。
- ◇教会関係の未信者とほとんど話していなかったことに気付いた。

- ☆ 宿題…①伝えるべきメッセージ(1)～(6)に該当する聖句を学びで示された聖句を参照しつつ自分で用意する。
- ②未信者の良くする10の質問(付録Ⅱ参照)の(1)～(5)の対応について考えてくる。  
(参加者が5人の場合は各自一つずつ分担)
- ③実際に個人伝道を実践する。

## 第3回

- † 個人伝道の分かち合い  
\*分かち合いのポイント
  - ①誰と話したか
  - ②どのような内容について話したか
  - ③相手の反応はどうだったか
  - ④自分自身の感想。今後の課題として感じたこと  
(それぞれが発表した後、担当者が今後の対応も含めたコメントをそれぞれの人に提示する)
- † 未信者の良くする10の質問1～5の対策の発表

(担当者がまとめとして、具体例を文書の形で提示。付録Ⅱを参照)

† 自分が関わりたい未信の友人の名をあげて個人伝道チームで祈る

☆ 宿題…①実際に個人伝道を実践する。

②未信者が良くする10の質問(6~10)についての対応を実際に考えてくる

#### 第4回

† 個人伝道の分かち合い(第3回と同じく)

† 未信者の良くする10の質問(6~10)についての対策の発表

† 4回の学びとまとめ…参加者に学び会に参加しての感想と提言を書いてもらう

† 自分が今後とも関わりたい未信の友人、知人の名をあげての祈り会

#### 参加者の声(個人伝道チームに参加して)

##### ◇KTさん(4年女子)

このような学びの場の必要性をまずとても強く感じました。(現実には教会でもないのに)今後ともいろいろな場で広がって欲しいです。私自身としては今まで何らかの形で伝えたり、又、伝えたいという思いも与えられていたのですが、学生のうちにしっかり学んでおきたかったし、励ましあって伝道のための交わりを持つことをしたことがなかったので良い機会となりました。学んだ中で自分の内側で信仰理解が整理され、特にみことばと対応させて理解、整理できたことが大きな収穫でした。伝えるということ、友と共に過ごし愛するということは、そうする中で本当に主に愛され支えられていることが分かり、一人で労することではないことが分かりました。

不思議だったのは、私自身この時期は卒論のことや忙しさの中にあ

## ●個人伝道の励ましのために●

って伝える機会があるのかしら…と思える状況だったし、ある人との関係でとつても傷ついてめげそうなことがあったにも関わらず、備えられたということです。

伝えるためには先ず友情、相手のことを心から耳を傾けることであって、本当に人との関係を考えさせられました。未信者の人との関係だけでなく、クリスチャンとの関係についても考えさせられ、またイエスさまと私との関係についても考えさせられました。関係を築きあげることが、さらに広がる宣教の働きとなってゆくのでしょうか。…4回の学びの中に、今の自分の人間関係のあり方はどうであるのかを率直に話し合ったり、ふりかえったり考えたりする時間もあっただけいいかも知れないと思いました。

### ◇YKさん(3年女子)

最初の学びが、創世記から入ったことが何より意外でした。でも良く考えてみると、「救われるってどういうことなのか?」とか「信じたらどうなるの?」という問いに答えるには「創造の初めの、祝福された神様との関係を取り戻すということだよ。」と答えるべきだなと気付かされた幸いです。そう言った時に、自分がその神様との関係をどんなに楽しんでいるかが重要だと思います。

### ◇HKさん(1年女子)

今の自分の周りにいる友人や家族のことを見つめる機会ができ、励ましあえる時であった。この期間中に、救いの証を書いたことも、自分の救いを改めて見つめることができ良かった。自分の信じている方は誰か。そしてなんで、従っていかうとしているのかを考えることができた。そして、1対1で関わっていくことの重要性を気付かされた。今まではけっこう多くの人を教会などに誘いかけ、後の対応ができないことが多かった。相手を理解して、その人との違いを見て、イエス・キリストは救い主であることを伝えていきたいと思う。そして神様は常に私の周りに、伝えるべき人を用意して下さっているように思えた。

◇R1君(4年男子)

自分の救いの経験を書く、という作業を通して、今まであいまいだったものが明らかになった気がする。ことばですべて言い表わすことはできないが、神様との関係がクリアーにされ、人に伝えていく上で自信を持つことができるようになった。言葉で言い表わせないまま、何だかぼんやりしたままだと神様との関係もいつのまにかあいまいになってしまうと思う。今回の学びを通して、具体的に祈ることの大切さをさらに思うようになった。「何を」「誰に」「どうやって」伝えていくか、漠然としていたところが、伝える人も与えられ、交わり、伝道していく中で、祈りが原動力であること、主が事を為してくださることを見ることができた。祈らないでやろうとすると、人間わざになってしまう。

いかがでしょうか。個人伝道チームの担当者となった筆者も、一メンバーとして他のメンバーと共に活動した期間中、実際に未信の人と個人伝道するよう心がけ、メンバーの祈りに励まされ、予想もしなかった時や場面で個人伝道の実践の機会が与えられました。これは、今回だけでなく、以前に何度か個人伝道チームを作って活動した時にも経験したことです。まさに御霊の導きを実感する機会でした。1997年秋に実施した個人伝道チームの参加者が証しているように、この学びと交わりと祈りの経験から少なくとも以下のような恵みを味わえます。

- ▽自分が何を信じているかを整理する機会となる。
- ▽キリストを信じた後の生きていく目標が明確になる。
- ▽自分の周囲にいる未信の知人、友人について思い巡らす時が持てる。
- ▽友人、知人(信者、未信者を問わず)と人格的に関わる大切さを教えられる。
- ▽何を伝えるかの整理と学びの機会となる。
- ▽祈られ励まされ、個人伝道を実践しようという勇気と時間が与えられる。
- ▽祈りの重要性を体験できる。

## ●個人伝道の励ましのために●

これらのことは、この小冊子でおりに触れ、記してきた内容でもあります。私たちは、ただ学ぶだけでなく、学んで確信したところにとどまりつつ（Ⅱテモテ 3:15）、周囲の友人、知人にみことばを宣べ伝える使命（Ⅱテモテ 4:2）を実践したいものです。それも一人でがんばるのでなく、同じ志を与えられた同労者と交わり祈りあう中で。

あなたも、この手引き書を参考にして個人伝道チームを作ってあなたの未信の友人、知人に個人伝道を実践しませんか！

「みことばを宣べ伝えなさい。

時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」

（Ⅱテモテ 4：2）



## 個人伝道ブックレット付録I

---

### 夏期学校における1対1の話し合い

・ ・ 個人伝道の導き方について ・ ・

---

序：夏期学校の最中、クリスチャンの皆さんは、グループの中にいる未信の参加者と様々な形で関わります。これから示すいくつかの例を、皆さんが彼らと夏期学校の期間中にどのように接し、どう導くことができるかの参考にして下さい。

#### 1. 《信仰決心を表明した人たちへ》

集会で講師を通して信仰決心の招きに応じた人と個人的に話すケースを想定してみましょう。招きに応じた人は、その人自身に聖霊が働かれ、「イエス・キリストを信じてみたい」との思いが内側から起こったわけですから、私たちも聖霊により頼みつつ、厳粛な思いで接しましょう。特にこの場合は、次の三つのことに心がけましょう。

- ① 招きに応じた動機を聞くこと。
- ② 何を信じたのかを聞くこと。
- ③ 御言葉による宣言と祈り

①を聞くことで、決心したその人自身が信じる動機について良い整理をする助けとなります。また②を聞くことで、決心した人が教理の面（神、罪、十字架、復活）でまだ不十分な部分を補ってあげることができます。そして③により、その人の決心が人間からの思いではなく、神からの招きであることを確信することができます。提示する御言葉の例としては、マルコ 2:5、ヨハネ 1:12、ローマ 10:9～11などがあげられますが、あなた自身が情熱と確信をもって示せる御言葉が良いでしょう。この大切な場面を、ある人は人がこの世に誕生することに例えて「産婆術」と呼んでいますが、人の霊の誕生を手助けする者として、整えられた奉仕ができるよう、祈り備え

## ●夏期学校における1対1の話し合い●

ておきたいものです。話してみて、相手の信仰決心がはっきりとわかった場合は、その人が決心に導かれたことを心から喜び、その場で感謝の祈りをしましょう。出来れば、決心した人にも自分の言葉で祈るように勧めてください。そして、今後の神様との交わり（一人で聖書を読むことや祈ること）、教会生活（礼拝や祈祷会に出席する勧め、まだ教会が決まっていな人には、主事などに聞いて教会紹介をして下さい）について簡単に触れて下さい。

一方、決心の内容がまだ不十分だと思えたり、もう少し信仰の核心について相手の人も話したがっている場合は、さらに時間をとって話すか、講師や主事、また熟練した上級生などにその人を紹介し、話してもらいましょう。

### 2. 《信じたいが何かにひっかかっている人たちへ》

このケースの人たちは、多種多様です。まず、相手の人がどういうことにひっかかっているかを明確に把握し（そのために、時間がかかることもあります）、忍耐をもって聞きましょう）、その後以下のような示唆をして下さい。

#### ①クリスチャンになった後の生活に不安を覚える人へ

クリスチャンに対して抱いているイメージが、「道徳的に真面目な人」「堅苦しい人」と感じる人や、自分自身に自信がない人に多いケースです。この場合は、どういう点が特に不安であるかを出来るだけ具体的に聞き、その後自分も具体的課題に取り組んでいる不完全な人間であること、けれどもイエス・キリストを人生の主人公として歩む幸いを得ていることを話してみると良いでしょう。

#### ②信じることができずに悩んでいる人へ

子供のように単純に「信じる」と言えないから苦しいと思う人たちがいます。これらの人たちは、求道生活が比較的長く、キリスト教の知識もそれなりに持っています。彼らには例えばローマ 4:5から、不信心な者をも義と認めてくださる神の寛容について示し、

その神への信仰を持てるように励まして下さい。

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。

(ローマ 4:5)

### ③教理面での疑問を持っている人へ

この場合は、本人からどういう部分に疑問を感じているかを具体的に聞きましょう。自分のわかる範囲内で、出来るかぎり誠実に答えましょう。ただ、話が堂々巡りになってしまったら、「この問題が解決できない限り、信じる事ができませんか」「この問題は、本当にあなた自身の問題ですか」などと聞いてみて下さい。多くの場合、教理の疑問はその人自身が信じる上での根本的な問題ではないからです。

### ④プロテスタントでなければいけないかという疑問を持つ人へ

例えば、両親、兄弟、交際相手がカトリック教会に行っている人から、カトリック信仰は認められないのか、と質問される時にはどう対応したら良いでしょうか。まず大切なことは、私たちが教条主義的になって、違いに対して攻撃的態度をとらないことです。そして私たちが信じ生活の土台としているプロテスタントの福音主義信仰（例えばK GKの信仰基準「92 学生の伝道、p. 42～46」を参照）の内容を、柔和な姿勢で示して下さい。

## 3. 《キリスト教に対しとても抵抗を示している人へ》

キリスト教、クリスチャンに対し、ある種のイメージを抱き、それが自分には受け入れられないと思っている人々のことです。しかし激しく批判する人は、案外キリスト教、クリスチャンに興味を持っているものです。ですからそういう人と接するには、じっくり話を聞いてみるのが第一です。たとえ抵抗を示していても実際に夏期学校に参加しているのは、「何か」を求めている証拠と言えます。

#### 4. 《様々な悩みを持って参加している人へ》

現段階で特に求道心があるわけではなく、実際生活で何かの悩みを持っている人には、いきなり伝道せずに、まずはその人の話を聞くところから始めましょう。そのような人には、夏期学校の5日間という短期間で決心に導くことをあせらず、むしろ友達関係を築くように努めて下さい。その人の抱えている悩みの内容が自分には負いきれないと判断した場合は、講師や主事など人生経験の豊富な人たちを、その人に紹介する橋渡し役になると良いでしょう。

#### 5. 《特に問題意識を持たずに参加している人へ》

この種の人たちは、友人に誘われて夏期学校に参加したけれど、あまり求道心はありません。彼らにとって、キリスト教の雰囲気の中で集中的に時を過ごすことは、かなりプレッシャーを感じるようです。ですから小グループの交わりの中で彼らとその場にとけこめるように心配りをして下さい。中には、夏期学校の期間中に次第に求道心を持つ人も起こります。例えば「自分の力だけで生きていくことは、間違いだとわかった」という発言をグループの交わりの場で聞いたなら、その後個人的に、もう少しその人の考えや気持ちを聞くように心がけ、チャンスがあれば福音の内容を紹介しましょう。

#### 6. 《受洗について躊躇している人へ》

参加者の中には、「自分は洗礼を受けていないから求道者だ」と言う人がいます。そういう人には、「イエス・キリストを個人的に信じていますか」と聞き、もし「はい」と返答してくれたら、「あなたはずでにもうクリスチャンですよ」と明確に宣言して下さい。彼らが受洗を躊躇する理由としては、①周囲の反対、②信仰生活への不安、③教会員になる煩わしさなどが考えられます。①については、周囲の理解が得られるように祈り続けるように励まし、自分もこれから

そのことを覚えて祈る約束をすること、②についてはクリスチャン生活の失敗談を率直に証しつつ、恵みの福音に立って信仰生活を送るように勧めること、③については、クリスチャンとは「神を信じる」だけでなく、神の家族（教会）の一員に加えられ所属することであり、そのことを神が望んでおられる（エペソ 2:19～22）ことを示しましょう。

## 7. 《キリスト教以外の宗教も必要なのでは、と主張する人へ》

仏教や孔子の教えなどに関心を持ち、キリスト教も良いがこれらの教えも同等に大切だと言う人に対しては、まずは彼らの意見を尊重して下さい。聖書の神観に立てば、神の被造物である諸聖人の歴史上の活躍を通して、人間の無常について、真理について、困難の中で生きる道についてなどが示されたと解釈できるので、諸聖人の存在や主張を否定する必要はありません。ただ”救い”という観点でこれらのことを捉える時、諸聖人は救いに至る方法は提示しても、救いそのものではなく、ただイエス・キリストが救いそのものである（ヨハネ 14:6、使徒 4:12）ことを話して下さい。他宗教に詳しい人は、様々な例を引用するでしょうが、わからない時は、むやみな論争をせずに、正直に「わからない」と答える紳士的態度が必要です。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければだれひとり父のみもとに来ることはありません。

（ヨハネ 14:6）

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名として、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒 4:12）

☆以上の他にも、様々なケースが考えられるでしょう。それは人間一人一人が各々ユニークな存在（神様によって創造された唯一の存在）なのですから、当然のことと言えます。しかし、夏期学校にお

●夏期学校における1対1の話し合い●

いて1対1で話す場合、次の3つのことが基本的に大切なポイントです。

- ① まず相手との信頼関係を作る。そのために、よく相手の話を聞くこと。
- ② いざという時には、大胆に福音の内容について語れる備えをしておくこと。
- ③ 語る自分自身が、夏期学校の期間中も神様との個人的な交わりを大切にすること。

夏期学校までの日々を、また当日も祈り備えつつ、この奉仕に励んで下さい。

## 個人伝道ブックレット付録II

### 未信者がよくする10の質問と解答例

#### <質問・1>

宗教は人間が作ったものである。したがって神は、存在すると思えば存在するのである。(私には神はいらない。私は神がいらないと思っている。) それなのにどうして神を信ずるべきなのか？

#### <解答ポイント>

多くの宗教は人間が神を作ったり、イメージしたりする。しかし聖書には、神が人間を造り、神の作品である人間と人格的に関わって下さる、と書いてある。

#### <文章例>

確かに「宗教」といわれるもののほとんどの神に対する考えは「人間が作ったもの」です。つまり人間が中心になって神の有無、必要・不必要を決めている、と言えます。そのような発想からはご質問のとおり意見が出るのは自然なことです。

しかしキリスト教の神観は全く違います。何故なら聖書の冒頭に「初めに、神が天と地を創造した」(創世記 1:1)と記され、また「神は、このように人をご自身のかたちに創造された」(創世記 1:27)と記されているように、人が神を作ったのではなく神が人を造った、と聖書は主張しているからです。

神はその作品である人間と人格的な関係(人と語り、人の祈りを聞く)を持ち、人間が最高の道を歩むことができるために命令を与

●未信者がよくする10の質問と解答例●

えますが、それは決して強制でなく、選択は人間の自由意志に委ねています。多くのクリスチャンは、このように人と関わる神を理解し、受け入れた時、人間としてのほんとうの安心感を得られることを味わっています。

〈質問・2〉

宗教は弱い人や病人のためのものである。私は弱くもないし病人でもない。それなのにどうして私が神を信じなければならないのか。

〈解答ポイント〉

「弱い」かどうかの領域は、肉体面だけでなく、精神面も含んでいる。また「自分の弱さを自覚すること」は、とても大切なことである。

〈文章例〉

「弱さ」「病人」という場合、肉体的な病をすぐ思いうかべ、「自分とは無縁だ」と思われる方も多いでしょうが、病の概念を内面的な領域にまで拡げると、多くの方が思いあたるふしが出てくるでしょう。しかし自分を弱い人、病人と認めることは人間のプライドが邪魔をし、案外むずかしいものです。聖書に「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です」(マルコ2:17)というイエス・キリストの言葉があります。彼はここで明らかに、肉体的な病人だけでなく、内面的な弱さも含めて語っているわけですが、私たちにとっては「自分の弱さ、無力さを認める」時、誰もが医者(神)を求める必要があることに気づくと思います。そういう意味であえて言うなら、キリスト教は「弱さ、病人であることを自覚した人のもの」と言えるでしょう。

〈質問・3〉

奇跡はどうしてありうるのか。



<解答のポイント>

神の天地創造を受け入れることができれば、奇跡（神の自然界に対するコントロール）は、不思議なことではない。奇跡中の奇跡は、人の罪が赦されることである。

<文章例>

奇跡を科学的・論理的に証明することは、確かにむずかしいでしょう。何故なら、奇跡とは科学の論理、常識を超越して起きるからです。しかし現実に奇跡が起こること（例えば、医学的には助からない、と言われていた人が延命する）は、多くの人が認めるどころです。

ところで、聖書から神の奇跡の有無を理解するのは、それ程複雑ではありません。何故なら、聖書に記されている神の天地万物の創造を受け入れれば、その神が自然を支配するのは、当然のことと考えられるからです。そして神が必要な時に、自然を超越した奇跡を起こすのは、たやすいと考えられるでしょう。

さて奇跡中の奇跡とは、神が人となってこの世に存在されたこと（それがイエス・キリストの姿です）、またそのイエスが自力ではどうにもならない絶望的な人間の罪を赦す、と宣言したことに他なりません。

<質問・4>

信仰を持つことは、確かに良いことだと思う。しかし何故、イエスキリストだけが信じるべき唯一の対象であると言えるのか。

<解答のポイント>

キリスト教信仰は信仰心（自分の内側にあるもの）でなく、何を信じるか（イエス・キリストを信じる）を重視している。ヨハネ14:6のイエス・キリストの大胆な主張に注目したい。

＜文章例＞

日本人の中で多くの方々は、信仰心の大切さを強調します。それは信仰心さえあれば、何を信じてもそれ程大差はない、との考えを生み出します。しかしキリスト教信仰では、信じる心、態度以上に何を信じるかつまり信じる対象に重きを置いています。イエス・キリストを個人的に自分の人生の主人公として認めることが、キリスト教信仰の特徴です。イエス・キリストは自分自身を「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ 14:6)と紹介しましたが、このような大胆な紹介者は、イエス・キリストしかいないでしょう。他の宗教の教祖は、道、真理、いのちに至る方法は紹介しても、その教祖は自分自身を、道、真理、いのち、すなわち神であるとは言いません。教祖が大胆な自己主張をする異端もありますが、これらは極めてある地域に限られた宗教であったり、長期間に渡って人々に支持されることが困難であることは、歴史の証明するところです。

約2千年前にこの地上に実在し、その後の2千年間、世界中の人々によって信仰され、慕われ続けてきた人物こそがイエス・キリストです。それゆえ、クリスチャンはイエス・キリストだけが信じるべき唯一の対象である、と主張しているのです。

〈質問・5〉

イエス・キリストについて聞く機会のなかった人たちは、救われることができないというのは本当か。

＜解答のポイント＞

自然界をとおして誰もが神の力を経験できる。わからない領域はわからないとし全知の神の判断に任せることにしてある。

<文章例>

おっしゃるとおり、キリスト教が世界のほとんどの地域に伝えられた現在でも、イエス・キリストについて一度も聞くことなく、この地上を去る人々もたくさんいます。しかし、聖書に記されているイエス・キリストが語った言葉を聞かなかったとしても、イエスの父である創造の神について、人間は生活の中で自然に意識している、と言えます。それは以下の聖書に記されている神の性質からわかります。「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ」（マタイ 5:45）「恵みをもって天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとであなたがたの心を満たす」（使徒 14:17）「神の目に見えない本性、神の永遠の力と神性は、世界の創造された時から、被造物によって知られ」（ローマ 1:18）…このことに異議を唱える人は少ないでしょう。このような経験をして、そこで創造神の信仰を持たなかったら、結果として神を否定した、と言えるでしょう。

しかし、このようなことは理解できても、「イエス・キリスト以外に救いはない」（使徒 4:12）との聖書の言葉に疑問を感じる人もいますでしょう。それに対する答えを理性的に求めることは不可能かもしれません。それは有限な人間の、無限である神理解の限界と言えるでしょう。クリスチャンは「わからない」ことは全知の神に委ねることにしています。ですから「イエス・キリストを一度も聞いていない人が救われぬ、滅びる」と断定はできません。人の救いを判断するのは、神の領域だからです。むしろ今イエス・キリストについて興味を持ち始めているあなたが、イエスの救いを他人事としてでなく、個人的にご自分のものとして受けとめて下さることを願います。

<質問・6>

もし神が実在するのならこの世の中にこんな多くの苦しみがあるのは何故か。神は何故、悪の存在を許すのか

<解答のポイント>

苦しみは、人間的成長の機会となる。人間の苦しみの根源は、人間が神を無視した罪の結果である。(本来滅ぼされても仕方がない存在である人間が生きているのは 神の憐れみである。) 悪  
の存在(サタン)を神が許しているように見えるが、神はサタン  
を必ず裁き、支配していることがわかる。

<文章例>

この世の苦しみは自分の人生の中で、あるいは毎日の新聞記事からでも、数多く見いだせます。苦しみのただ中にいる時、「神がいるなら何故」と思わず叫びたくなるのが人間の偽らざる気持ちでしょう。しかし「苦しみ」はそれをとおし教えられ、むしろ人間的に成長する機会を提供してくれる、とも理解できます。聖書の中に「苦しみに会ったことは私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇 119:71)、という神を信じた人の告白があります。苦しみそのものは辛い経験ですが、それを通して人間にとってのほんとうの幸せ(神を知り、自分を知る)を発見することができるのです。

また苦しみそのものは、聖書によれば人間が神を無視した罪の結果である、と言えます。神を無視した結果、人間が神から滅ぼされて当然のところを、「土地がのろわれる」(創世記 3:17)という程度に留まり、神の怒りが直接人間には下りませんでした。とはいえ、土地が不毛になることは、人間にも影響を及ぼした「苦しみ」ですが、人間の罪とは神の目から見れば、それほどまでに重いことを、苦しみをとおし理解する必要があります。また、神はその苦しみからの解放を提供(キリストが十字架にかかり、人間の罪のすべてを解決した)されたことを、心にとめて下されば、と思います。

次に「悪の存在」を神が許すことについての質問ですが、神の目から見れば、その悪の存在すら神の支配下にあり、一見不条理に見

える悪の存在が、長い目で見れば神のご計画の一部として捉えることもできます。(それほど単純ではありませんが) はっきりしていることは、神は悪の存在(サタン)を認めてはいても、この存在すらも支配していることです。それは以下の聖書の言葉からわかります。

主はサタンに仰せられた。

「では彼をおまえの手に任せる。ただ彼のいのちにはふれるな」

(ヨブ記 2:6)

### 〈質問・7〉

キリスト教が真理ならば、何故多くの宗派が存在するのか

### 〈解答のポイント〉

プロテスタントの福音主義に絞って見る場合、強調部分の違い、日本に伝道した宣教師の所属教派の違いゆえ、様々な教派が存在している。しかし、土台は同じなので互いに協力できる。

### 〈文章例〉

「キリスト教」と一言でいってもカトリックとプロテスタントの違い、プロテスタントの中でも「聖書」をどのように扱うか、において、批評的に扱うグループと聖書そのものを客観的に真理である、とみなすグループの違いがあります。私たちはプロテスタントで「聖書は神のことばである」と信じるグループに属していますので、その範囲の中で答えさせてもらいます。

実は聖書を神のことばである、と信じるグループの中でも、御指摘のとおり数多くのグループがあります。仏教では「宗派」と呼びますが、私たちはこれを「教派」と普通は呼んでいます。バラバラにならないで一つになれば良いのに、と思われるでしょうが、このような結果になっているのは①聖書に忠実であろうとした結果、ある真理の一面を他の面より強調し、そこに違いが生じたため ②日本の教会は宣教師の影響を強く受けていますが、日本に宣教に来た

人たちの属する教派が様々であったため、と考えられます。しかしながら、若干の違いはあっても、「聖書は神のことばである」と信じる土台が同じならば、私たちのK G Kのように、「超教派団体」といってお互いの教派の特徴を認めつつ、いっしょに活動することができます。

〈質問・8〉

私はキリスト信者になるならば、自由を失って幅のない人間になってしまうのではないか。喫煙や飲酒の禁止なども含めて人間的、精神的にもキリスト教という型にはめられて成長できないのではないか。

〈解答のポイント〉

喫煙・飲酒などを単なるキリスト教道徳として捉えるならば、やめるのは辛い。その場合、何故やらないのかの動機（神が与えられた体を大切に管理）が大切である。それがわかる時むしろ自由に主体的に行動できるのがクリスチャンの特徴である。

〈文章例〉

御指摘のとおり、キリスト教のイメージには堅い、真面目、不自由、という点があります。「キリスト教徒になると煙草をやめなければいけないから辛い」と言って、クリスチャンになることを躊躇する人がいます「キリスト教という型」と言われるのは、これまでのキリスト教の歴史の中で「クリスチャンは～すべきでない」という禁止令が強調された傾向があり、そのことを私たちも反省しなければいけないと思っています。

しかし大切なことは、行ないでなく行ないを促す動機です。例えば私たちが煙草を吸わないのは、煙草が体に害である、と理解するからであるとともに、私たちの体は私たちを愛し生かして下さっている神が、私たちに与えて下さったものであり、その神の計らいに応答するために、体を大切に管理しようと考えているからです。つ

まり動機が明確なので、いやいやでなく主体的に行動できるのです。以上の理由で、クリスチャンになったことで私たちの生活が不自由になったというより、自分自身の判断で自由に主体的に行動できるようになった、と思っています。

〈質問・9〉

道徳的にすぐれている仏教徒のような人をどうして罪人と判定できるのか。

〈解答のポイント〉

キリスト教の場合は「罪人」という判断を外側の態度、行為でなく、内側の心の状態、神との関係を問題にして判断している。その視点から捉えるなら道徳的にすぐれた仏教徒も罪人である。

〈文章例〉

「罪人」という場合、何を基準にして判断するかが大切だと思います。ご質問のとおり道徳面だけとりあげれば、キリスト教徒よりよほど優れた仏教徒は数多くいらっしゃるでしょう。私たちクリスチャンは「道徳的に低くても構わない」と開き直るつもりはありませんが、少なくとも仏教徒の方で人間的な魅力もある優れた方がおられる現実を認めます。

しかし聖書における「罪人」の概念は、いわゆる外側の行為を指すのではなく、内側の心の状態、もっと言えば創造神との関係から定義されています。「私は自分がしたいと思う善を行なわないで、かえってしたくない悪を行なっています」（ローマ書 7:19）「人の心は何よりも陰険で、それは直らない」（エレミヤ 17:9）というような聖書に示されている姿が、人間の实態ではないでしょうか。そういう意味で、たとえ優れた仏教徒でも「罪人」なのです。心の内側に光を当てるキリスト教の罪観は、「お払い」という外側を清める儀式をとおして内側も清くなった、と受けとめる神道の考え方とは正反対なのです。

〈質問・10〉

キリスト教は西洋の宗教である。したがって日本人である私とは何の関係もないのではないか。

〈解答のポイント〉

キリスト教の主人公であるイエス・キリストは西洋で活動した人物ではない。聖書によれば、キリストの教えは特定の民族、文化を対象としたものでなく、すべての人、文化を対象に語られているゆえ、私たち日本人もキリスト（教）と深く関わりがある。

〈文章例〉

「キリスト教は西洋の宗教である」というお考えは、一般的に言われる意見です。しかし実はキリスト教の主人公であるイエス・キリストが活動した場所は、ヨーロッパではなく現在のイスラエル、すなわちアジアでした。（この地域分類はサッカーのワールドカップの予選リーグでイスラエルがアジアに属することからも明白です。）キリスト教が西洋に広まったのは歴史的事実ですが、キリスト教の内容そのものは決して西洋的ではありません。

また「キリスト教は西洋の宗教だから私たち日本人とは関係がない」という意見も良く聞きますが、聖書を読めばそこには特別に民族、文化の分け隔てがないことがわかります。キリスト教の母体であるユダヤ教は、ユダヤ人を強く意識していますが、「福音は信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」（ローマ書 1:16）この聖書の言葉のごとく、キリスト教は特定の民族だけでなく、すべての人を対象にして伝えられてきました。それゆえ、当然私たち日本人とも深い関わりがあるのです。



### 個人伝道ブックレット付録Ⅲ

《個人伝道チームの学生の書いた救いの証し  
私は～から～へと変えられたか》

実例・1

#### 自分中心の生き方から、 神様から与えられた使命に生きる生き方へ

私が初めて教会に行ったのは小学校3年生の時、教会学校のクリスマスの日でした。それから毎週母の手にひかれ、教会学校に通うようになりました。中学校に進学してからも教会に行っていました。が、受験を前に友人関係でいざこざがあり、人間関係に恐れをおぼえるようになりました。教会に行っても、人と話したり、つきあっているうちに、何か失敗してしまうのではないかと感じてしまうので、人間関係が苦痛でした。

また中、高生の頃は、人間の存在について考えた時期でした。私は太宰を愛読していましたが、『人間失格』の主人公の「生まれてすみません」という言葉になんともいえない悲しさを感じました。人間は何のために生まれてくるのだろうか？どこから来てどこへ行くのだろうか？生きる目的も分からずに存在する…こんな悲しいことってあるだろうかと思いました。

私はその頃、自分は自分、何も頼らず、勝手気ままに生きて行こうと思い、教会から離れていましたが、本当の自分は小さい者だ、惨めなものだ、存在自体も分からない者なんだということを気付き始め、空しい生活に行き詰まっていました。受験期になると心の支えを求めるようになり、そんな時、教会学校で覚えた聖書の言葉がふと思い出され、聖書を読んでみようかと思いたち、教会にも再び行くようになりました。

●個人伝道チームの学生の書いた救いの証し●

聖書には天地を造られた神様が人間を創造したとあります。しかし、人間は神様にそむき、神様を無視し、自分中心の生き方をするようになりました。(これが聖書のいう“罪”です。)そんなどうしようもない人間をなおも神様は愛し、人間を救うためにひとり子イエス様を与えて下さったというのです。本来なら神様にそむいた罰を受けなければならないのは人間なのに、身代わりにイエス様が十字架にかかり、死んで下さったことを知りました。

このことは私にとって関係のないことだろうか？自分のことを考えた時、私こそ、神様から離れ、イエス様を十字架につけた張本人だったのだと気付きました。「迷える小羊」という言葉をよく耳にしますが、私がそれだったのです。羊はころんでひっくり返ってしまうと、自分では起き上がれないそうです。神様のもとから迷い出で、ひっくり返って足をばたつかせながら「人生はなんて空しいんだろう。私はなんのために生きているんだろう。誰か私を助けてー！」と叫んでいた羊のような私を、羊飼いいエス様が探しに来て下さいました。

私はイエス様を信じる決意をし、洗礼を受けました。大学1年生の時のことです。私は弱い小さな羊のような存在ですが、私の羊飼いいエス様は確かな方ですから安心です。自分の存在の意味も知ることができました。私でなければできない、神様が私に与えられた使命を生きるように、神様の素晴らしさを現していくように造られたのだと。そして、使命を終えたら、神様のもと、天国へ帰って行くのだと。イエス様と出会ったことで、自分中心の空しい人生から救い出され、神様中心の希望の人生への道が開かれたことに喜びを感じます。

「わたしが来たのは、羊がいのちを得、

またそれを豊かに持つためです。

わたしは、良い牧者です。

良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」

(ヨハネによる福音書 10 章 10～11 節)

実例・2

虚しさから生きる目的の発見へ

私が初めてキリスト教と接したのは幼稚園の時に、家の近くの教会学校へ行っていました。家族はクリスチャンではありませんでしたが、私が小学生の時に母がクリスチャンになりました。

私は小さい頃から納得しないと気が済まない性分で、しかも人から押しつけられたり人の言いなりになるのが嫌いでしたが、中学生の時に勉強をする理由をよく考えるようになりました。試験で良い点数を取ることが本当に勉強なのだろうかと疑問を持ち、勉強する理由が分からなかったので勉強をしませんでした。中高一貫校に通っていた私は受験のないまま高校に進学しました。高校生になると将来何をしたいか、そのためにどんな大学へ行きたいかを考えるようになりました。そして私は、中学時代に勉強をしなかったので勉強ができないことに気づき、劣等感を持つようになりました。

劣等感から学校になじみにくくなったこと、学校や社会のあり方に疑問を感じていたこと等から私は学校へ全く行かれなくなりました。高校2年生の秋でした。それからは家に引きこもり、生きる気がなく憂鬱で、将来どうなってしまうのか不安で気が狂いそうな日々を過ごすようになりました。

そんな不登校の悩みを通して私は2つのことが分かりました。私は勉強ができない劣等感を感じていましたが、できない自分を憎み、自分よりもできる人をねたみ、自分よりできない人をさげすんでいることに気づきました。そしてこのねたみやさげすむ思いは、いくらなくそうとしてもなくせませんでした。自分の努力で自分を良くすることはできないこと、これが1つ目の発見でした。2つ目の発見は、私はずっと生きる意味を考えていましたが結局分からず、生きることに虚しさを感じているということでした。そこから私は自分とはなんと頼りにならないのだろう、神様から離れては歩めない

のだということを感じました。

私は自分ではどうすることもできない問題・・ねたみやさげすむ思いや虚しさといった問題を解決できなかったのは、神様にそむいて生きていたからなのだと知りました。そしてイエス・キリストが十字架にかかったのは神にそむいていたがゆえに生じた私のこれらの問題を解決して、私が本当に生きようになるためなのだと信じ、神様なんて必要ないとして自分中心に生きるのではなく、イエス様に従って生きようと思いました。

イエス様を信じてから私は心の中の虚しさがなくなりました。かつては生きることに意味なんてないと思っていましたが、万物を創り支配しておられる神に愛されていることを知り、神に従って歩むことが「生きること」なのだと知りました。また、私は何かができることに最大の価値を持っていましたが、人は「できる」「できない」にかかわらず神様に愛されているのです。私は虚しさから、聖書が示す通りに、神を愛し、人々を愛するという人生の目的を見いだして、今生きています。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。  
わたしはあなたを愛している。」  
(イザヤ書 43 章 4 節)

## 個人伝道ブックレット付録Ⅳ

### 個人伝道の学びと実践のための推薦図書

個人伝道について学び、実践していくためにたいへん有益であり、一読を奨めたい図書を以下に紹介します。これらの図書は現在出版されているもの、またわかりやすい内容のものに限定しています。便宜上、4つの部門に分類しましたが、それぞれの本はどの部門とも深いつながりがあります。個人、グループの学びの参考にして下さい。

#### A. 自分の救いの土台を確認するために

太田和功一「信仰の土台の再確認」

(1995. キリスト者学生会)

J. ストット「信仰入門」

(1995. すぐ書房)

C. Sルイス「キリスト教の精髓」

(1996. 新装3刷 新教出版社)

#### B. 福音の内容の伝達を確かなものとするために

J. I. パッカー「伝道と神の主権」

(1997. 再刷 いのちのことば社)

J. マクドウェル「神か大工か」

(1996. 7刷 いのちのことば社)

A. マグラス「キリストの死と復活の意味」

(1995. いのちのことば社)

内田和彦・ネットランド「キリスト教は信じられるか」

(1997. いのちのことば社)

●個人伝道の学びと実践のための推薦図書●

C. あかし・伝道の動機と実際を学ぶために

R. コールマン「伝道のマスタープラン」

(1995. 3刷 いのちのことば社)

R. リンカー「あなたにもできるあかし」

(1997. 新装再版 いのちのことば社)

近藤勝彦「伝道する教会、伝道する信徒」

(1995. 日本伝道出版)

R. ウォレン「健康な教会の鍵 9～11章」

(1998. いのちのことば社)

D. 個人伝道のための教材

豊留真澄「心と心の伝道」

(1974. いのちのことば社)

W.ヨーク「one to one」

(1995. キリスト者学生会)

ボーエン・フライシュマン「基礎の学び」

(1998. 聖書を読む会)

B.セントクレア「福音を伝える」

(1991. CS成長センター)